

総会記念講演会「三重県無形文化財になった海女」 4月18日

志摩の海女を文献で見る

海の博物館館長 石原 義剛

志摩半島に、いくつかの遺跡があり、アワビの殻やアワビを岩から剥がしとる「アワビオコシ」と呼ばれる鹿角製の道具が出土しますので、潜水して漁をしていた人が縄文時代の末期にいたことは間違いありませんが、それが女だったという証拠はありません。

それでは女である海女はいつ頃から、その存在が人々に認識されるようになったのでしょうか。

海女という字は明治の中頃から使われたまだ新しい用字です。古代では、漁師など海で暮らしを立てる男も女も「あま」と呼ばれていたようで、万葉集には海人、白水郎、海未通女、海處女など書かれています。歌ではないのですが山上憶良(660~733?)の『沈痾(病に沈む)文』の注に「潜女」とあるのが初出で、潜りをする女性がいることを記しています。万葉集には「伊勢の白水郎(あま)の朝な夕なに潜くといふ鮪の貝の獨念(かたおもい)にして」などの歌がありますが、「白水郎(あま)」は女か男か判りません。

はじめて潜女(海女)が伊勢志摩にいたことを示すのは、時代は少し下りますが、延喜式(927)のなかにある「伊勢国供御贄潜女三十人・潜女衣服料二千七百七十三束九把並伊勢国正稅充之」という記載です。伊勢国とあるのは志摩国をも含みます。志摩半島の海女が神宮に「御贄」を奉るのでその報酬としてお米を貰っていたことが判ります。

その後、志摩の話しではありませんが、枕草子(10世紀末)に清少納言は、海女の潜水作業を見たことがあるように、男を責める文を載せています。「あまのかづきしたるは憂きわざなり。」海女の潜っている様子は心配なことだ。男がするのならまだしも、男は船の上で歌なんかを唄っている。海女が浮上するときは綱を引き上げるが、船端に上って息も絶え絶えな姿をみていると、気の毒でしょうがない。それなのにまた海女を海へ落とし入れる男はけしからん、と。

清少納言が書いた同じ作業風景を、それから800年ほど後の「日本山海名産図会」(1799)の著者である蒔岡月は描いています。



この絵では決して船の男は遊んではいません。共同作業で漁に励んでいます。貴族の娘であった清少納言は海女の働きを誤解していたようです。今日では少なくなりましたが、夫婦で作業をする船人(ふなど、ととかか船ともいう)は最高の稼ぎのある海女漁だったのです。



江戸時代後半になると、海女は多くの浮世絵に描かれるようになります。江戸や大坂の町人から都市では見られぬ女の潜水姿は好奇なものだったと思われませんが、藤原不比等の子・房前の母が海女だったという謡曲のストーリーを題材とした浮世絵などが、海女の存在を広めました。

明治16(1882)年、東京上野で開催された第1回水産博覧会に三重県が提出した「三重県水産図解・図説」には多くの漁法の図とともに海女の図が3枚あります。その1枚には陸で焚火を囲んで談笑する海女たちが描かれています。



昨平成26年1月、志摩半島の海女が三重県無形民俗文化財に指定されました。これまで芸能や伝統工芸技術などが指定される中で、生活手段である漁業の技術をもつ海女が文化財に指定されたことは、画期的出来事と云って過言でないと思います。しかし、その僅かの資料しかお見せできませんでしたが、海女の歴史は長く、その長い間、資源を涸らすことなく漁を守り、暮らしを守り続けてきた海女漁は文化財と呼ぶにふさわしい内容を持っています。さらにユネスコ世界無形文化遺産に登録したいと運動しています。